

下地と慣れ 佐佐木頼綱

前回、若い世代の短歌への批判と反論について記した。上の世代から様々な批判がされているが、若い世代も結社に属す割合が低いせいか特に反論や歩み寄りがなく世代間で断絶が生まれている。この現象は実は歌壇だけではなく様々な分野で起こっている事のようにだ。新たな表現を多く取り入れた事で演劇との違いが曖昧になっている現代歌舞伎や、アートと距離が肉薄した漫画、そして現代音楽が類型としてあげられる。

現代音楽は調性(メロディー)が無いのが一番の特徴である。調べが無いので愛誦性も概ね無い。曲には不協和音が散りばめられていて、唐突に鳴らされる音が「気持ち悪い」「ホラー映画」と批判される事もある。ただ聴いただけでは曲の意図も分からない為、「前衛」「難解」「意味不明」「ナンセンス」「意外性だけ」「切り貼り」「独り善がり」「こういう音楽がクラシック音楽を衰退させた」「音楽じゃない」といった歌壇でよく聞く批判もされる。批判を込めて「ゲンダイオンガク」とカタカナ表記がされる事もあるそうだ。私は現代音楽の良き理解者ではないのだが最近少しずつ批判が的外れな部分を感じる様になってきた。現代音楽はクラシック音楽の伝統を踏まえた作曲がされているので、クラシックの知識を踏まえ進行を予測しながら聴くと表現を読み解くこと

が出来る。コンサート会場にはスコアを持った作曲家らしき人が多くいて彼らが真剣勝負をしている事がわかる。表現しているものはスリルやエロチズム、葛藤、虚無感、爽快感、緊張といった現代的な抒情。表現の幅は広く4分33秒間何の演奏もされない曲やジャズや民族音楽の要素を取り入れた音楽も生まれ始めている。現代音楽が大衆から離れてしまった理由は①作曲家の芸術表現が先鋭化し作曲家しか理解できない曲になっていった事②発表の場がアカデミックなサークルの場になってしまった事③調性のはっきりしたクラシック音楽を作曲しても過去の偉大なクラシック作品の焼き直しと取られてしまい評価がされない事④大衆側が中世く近代のクラシックしか聴き慣れていない為、それ以後の曲を理解できない事が大きな要因で、これらの反省から現代音楽業界では大衆性を加味した採点方法を導入したり、親しみやすい要素を含んだ曲が作られ始めている。

現代音楽の状況は概ね歌壇が抱えている問題であるように思えた。現代音楽になぞらえながら歌壇での相互の不理解を分析するなら、そこにあるのは下地の違いや慣れ、分類の問題だろう。若い歌人の短歌の下地は必ずしも和歌短歌ではなくアニメやゲーム、小説、漫画、ドラマのセリフやポーズ、ストーリーを含んでいる。必ずしも読んでおくべき小説というのはなくなり、多様な下地を持つ歌人が歌を作る。「若い歌人の短歌」という大雑把な分類も理解を阻んでいるのだろう。

現代音楽をいくらか聴き、作曲家の解説を得たことで私は現代音楽にアプローチすることが出来るようになった。玉石混交を築しみながら、橋渡ししてくれる人を発掘しながら、エポックメイキングな作品を探し、一分野として共有したい。